

NECソリューションイノベータ
創立50周年記念企画

SF短編小説

失敗の失敗は成功？

2025.9

作者： 田中伸幸

イラスト： ハミ山クリニカ

『おつかれさまです。本日も完璧な一日でした』

ホログラムディスプレイには代表取締役『佐藤翔宙（さとうかける）』と僕の名前がでかでかと浮かび上がっている。これのどこが完璧な一日なのか。サブコンシャス・ショッピングモール『ジャパン・ドリームプラザ』の観光案内所で僕は盛大に溜息をこぼした。中空に投影されたディスプレイには本日の来店者数が表示されている。たったの17人。去年の同日は32人だったから約半分だ。

「お疲れさまです、佐藤さん」

振り返るとカウンターの向こうでアルバイトの小林永莉（こばやしえり）がホログラムが浮かべる今日のツアーの評価に反し、なにやら物言いたげな表情を浮かべている。顧客満足度は98パーセント。文句のない数字だ。

「……わかってるよ。お客さんはみんな満足して帰っていく。でも、リピーターは減る一方だ。どうしてだと思う？」

小林が首をかしげると量子統合ネットワーク『Quantum Guardian』が瞬時に彼女の疑問を察知して宙に回答を表示しようとする。邪魔だとばかり僕は手を振ってそれを掻き消す。

「飽きちゃったからさ。新しいコンテンツ、新しい失敗がないんだ」

失敗体験ツアー。それは2075年の高度予測社会において、唯一『予想外』を味わえるエンターテインメントだった。大手IT企業が競って開発した『Shinrai』や『Sentinel』といった『失敗防止AI』があらゆる想定外を未然に防ぐインフラとして定着した今、人々はオリジナルの失敗をしなくなってひさしい。32歳の僕を含めてもそうなのだから小林永莉や今の若者は間違いなく『失敗未経験世代』である。電車の遅延も即座に解消され、料理の失敗も恋愛のすれ違いもすべてが事前に予測され、回避されるか、最適化されてしまう。

だからこそ、かつての人々が日常的に体験したという『失敗』に需要が生まれた。特に2025年は失敗の黄金期と呼ばれ、多くの失敗データを発生させてくれている。メールの誤送信だったり、電車で居眠りをして目的地を通り過ぎてしまったり。そうした不測の事態をあえて疑似体験する観光『失敗体験ツアー』で人間らしい感情の起伏を味わうことが現代の人々の娯楽の形だった。

けれども、ここに来てあらたな問題が発生した。ほとんどの現代人が既存の失敗をほぼすべて味わい尽くしてしまったのだ。どんなマニアックな失敗も、どんな珍しいハプニングも、一度、疑似体験してしまえば二度目は鮮度が落ちる。よほどの物好きや暇人でもなければ同じ失敗を再度体験しようとは思えない。

「新しい失敗が必要なんだ。新しい失敗が……」誰にともなく呟く。「でも、『Shinrai』や『Sentinel』がある限り、待っていても新しい失敗は生まれない」

お先真っ暗だと頭を抱えた、その時だった。ショップのドアが開く音に顔をあげれば、そこに一見して顧客でないと察せる一人の女性が立っていた。年齢は小林よりも年上で、しかし僕よりはやや下ではなかろうか。それでいて僕よりもあきらかに落ち着いた雰囲気を感じている。大学教授のような、研究者のような、独特なたたずまい。周囲にはホログラムで無数の数式やグラフを浮遊させ、なにやら常に計算している。

「突然失礼いたします。私はアフタクション・ストウブ・シネフィル研究室の井上翼紀（いのうえつばき）と申します」

女性は丁寧に頭を下げると周囲に浮かべた数字の合間から名刺情報を引っ張り出した。『東京未来大学』の文字が薄く輝いている。

「失敗学の研究をしているのですが、アフタクション・ストウブ・シネフィルという分野をご存知でしょうか？」

アフタクション・ストウブ・シネフィル。予想外の事態やミスを単に失敗として捉えるのではなく、芸術的・文化的価値を持つ現象として収集・保存・研究する失敗学の中の新しい研究分野。

井上と名乗った研究者が告げるなり、彼女の後ろに説明書きが浮かび上がる。

「……映画愛好家（シネフィル）になぞらえ、失敗体験を映画のように記録・鑑賞し、その美学や価値を追求することで人間本来の——って、失敗体験ツアーそのものじゃないですか。そんな研究分野があるんですね」

「そうなんです。そこで、ぜひとも御社と共同研究をさせていただけないかと。少しお話を聞いていただけませんか？」

「構いませんよ。むしろ、ちょうどよかった。実はこちらにも相談したいことがあるんです。失敗学の研究者ということは失敗のスペシャリストということですよね？」

「スペシャリストと言えるかどうか……私でお答えできることならよいのですが。どのようなことでしょう？」

井上は無理難題を吹っ掛けられないかと若干の警戒を浮かべつつ、片眉を持ち上げて聞いてきた。しかし僕の言葉を聞くなり、たちまち目を輝かせ、前のめりになった。それこそ己がしたかった研究なのだと言わんばかりに。

「新しい失敗を作りたいんです。前代未聞の、最高の失敗を」

「協力させてください！ ぜひ！！」

「……即答……ですか？」

「はい！！」

こうしてアルバイトの小林が呆気にとられている間にあれよあれよと事が進み、僕と井上翼紀の完璧すぎる世の中への反乱が、失敗をするための計画が始まった。

翌日のこと。僕はさっそく帰省し、実家の物置から埃まみれのキーボードを引っ張り出してきた。2075年の現代ではプログラミングは思考だけで完結される。人間がソースコードを書くなど石器時代の行為に等しく、製造年月日2025年9月9日と刻印されたこのアナログな入力デバイスなど、もはや骨董品の類いだ。

僕が『失敗への挑戦』として最初に思いついたのが祖父が使っていたという、このキーボードだった。祖父は、生前、よく不具合を起こして徹夜したものだと話していた。僕からすれば最も身近な失敗経験世代のレジェンドだ。システムエンジニアだった祖父でさえ、望まずして頻繁に不具合を発生させていたのだ。プログラミングなんて勉強したことのない僕がでたらめに作成したアプリケーションならエラーが起こらないわけがない。

キーボードをどこにどう接続すればよいのかと紆余曲折あったものの、東京未来大学のバックアップあって準備は万端に整った。中空に浮かぶディスプレイから視線を逸らせば、傍らで井上が記録用のスマートグラスをはめて頷いている。

「それじゃあ、始めます」

人差し指1本でつんつんしながら慣れないエディタを開き、恐る恐る失敗に向けての一文字目を入力する。刹那、軽やかな音楽が鳴り、キーボードが勝手に動き出した。直後、ディスプレイに失敗防止AIからのメッセージが並んだ。

『どのようなアプリケーションを作成いたしますか？』

「えっ？ あれ？ キーボードが反応しなくなった」

「……人間が手動でコードを書くという行為自体が非合理的であり、失敗の原因だと認識されたみたいですね」

まさかアプリケーションを作る前から防がれてしまうだなんて。いきなり出鼻を挫かれて驚愕する。

「って、いや、AIにコードを書かれたら失敗できないじゃないか」

「うん、これはこれで面白い研究結果です」

「いやいやいや、そうじゃないでしょう!？」

井上は興味深そうにデータ分析しているけれど、僕としては新しい失敗を作れなければ商売が立ち行かない。

「次だ! 次っ!!」

翌日、僕は井上と食材の購入に向かった。次の計画は単純だ。高カロリーな食材を大量摂取し、暴飲暴食で標準体重の枠を外れること。既に料理は伝統芸に昇華されており、基本的にはボタン一つで何でも食べられる。希望のメニュー、希望の味。それでいて何を食べても栄養やカロリーは適切にコントロールされてしまう。となれば、食材から調達せねば失敗には至れない。そもそも加工品以外の食材を売っているところが一般向けには見当たらず、東京未来大学の学食を運営する会社経由で加工食品業者向けのスーパーに足を運んだ。

「バター、生クリーム、牛脂、マヨネーズ、鶏皮、ベーコン、アボガド、さつまいも——」

食材を乗せたカゴをカウンターに乗せると自動精算レジが一瞬停止した。次の瞬間、カウンターの天板が開き、カゴが没収されたかと思えば、すぐさま戻ってくる。まるで手品だ。そして見事なそれを披露してくれたレジ端末が手品の種明かしよろしく説明をくれる。

『お客様は個人で食材をご利用ですね? お客様の健康状態をスキャンし、食材を食材相当の加工品に交換しました。お値段もこちらの方がお安くなっております』

バター、生クリーム、牛脂、マヨネーズ、鶏皮、ベーコン、アボガド、さつまいも—— 見た目はすべて食材そのままだ。これがすべて加工品だなんて。

「病気になる前にわかる、というあれですね。採血を必要としない血中タンパク質の遠隔解析技術による判定かと……」

「いやいやいや、買いたい物を買えないなんておかしいじゃないか!」僕はレジに向かって声を荒げた。「わざと体に悪いものを食べたいんだよ、僕は!!」

『申し訳ありません。意図的に健康不良を引き起こして医療費を増大させることはテロ行為に認定されています。また、そのような発言をされるお客様は健全な精神状態にないものと推測されます。カウンセリングAIを呼び出しますので、そのまま少々お待ちください』

「ごめんなさい! なんでもないです!!」

あやうく大事に至るところだった。慌てて二人で逃げ出し、あれこれ買った食材で試しに太りやすいような料理を作って食べてみる。しかし味は落ちるは体重は変わらないはと散々な結果に。

「まだだ！ まだあきらめないぞ！ 次だ！！」

第三の作戦はもっと大胆なものにした。ダイビングショップを運営する友人に事前に断りをいれたうえで嘘の予約を入れ、当日、すっぽかして職場に出社するという計画だ。これなら失敗しないわけがない。井上も今回は上手くいくのではないかと専門家としての意見をくれ、否が応でも期待が高まる。

「さあ、失敗するぞ！」

朝8時。僕は井上を伴って、いつものように自動運転車に乗ってショップを目指した。そのまま二人で車に揺られること30分、気づけば窓の外に海が見えてくるではないか。ジャパン・ドリームプラザのある都心とはまるで違った景色が広がっている。

「えっ？　なんで？　ちょっと！　これじゃあ仕事に行けないじゃないか！？」

驚きの声をあげる僕へ自動運転車から失敗防止AIの音声メッセージが聞こえてくる。

『潜在意識をスキャンした結果、本日は海洋レクリエーションが最適と判断しました。各所との業務調整は済んでおりますし、どうしてもという場合に備えて移動式のワーキングスペースもビーチに手配済みです』

「……電話しないと。誰かが僕の代わりに出勤してくれているだろうから」

つぶやくなりコール音が響き、眼前に小林永莉の-avatarが映る。

「ごめん。お休みの予定だったろうに……急に」

「今日は暇だったので大丈夫ですよ。むしろ休日手当もらえてラッキーです。そんなにお客さんも来な——」

悪気無く言いかけたアルバイトの彼女の-avatarが途中でハッとした表情を浮かべる。

「……だよね。とりあえず、よろしくね」

通話を切ると再び失敗防止AIの声が聞こえてくる。

『潜在意識をスキャンし、本日の急な出勤がポジティブに働くメンバーをアサインしています』

「そう……なのね」

見上げれば空は青く、また海も青い。視界の端に映った透明で開放感のあるドーム型のワークスペースは防水仕様で濡れた水着で空や海を眺めながら仕事ができるそうだ。ダイビングをし、スキューバギアを着けたまま打ち合わせをし、また仕事に戻ることができる。

「最高の環境だな。驚くほどに。失敗の『し』の字もない」

「……すいません、事前に気づけなくて。思えば本人でも気づきにくいメンタル不調の初期段階で会社に行こうとしても森に連れていかれてリフレッシュさせられる世の中ですもんね。最初から無理な計画でしたね、これは」

「仕方ない。ひさびさの海だし、のんびりして……って、そんな場合じゃない！ 早く失敗しないと！！」

「——って、本当にこれを？ やる前から結果が分かっているような？ しかも佐藤さんだけでなく私もやるんですか？」

「そりゃあそうでしょう。協力してくれるって言ったじゃないですか。一人より二人です。そのほうが確率が上がる。どちらかがNGを出せばよいんですから。それに意外とこういう古典的な方が上手くいくかもしれません」

第四の作戦はそれぞれ変装して空港の認証システムに挑み、本人認証に失敗すること。つけ髭、サングラス、帽子。はてはホログラム式の仮面まで装着する。

「よし、これで絶対に失敗できる！」

「うーん、どうでしょうか……」

意気揚々と挑むも認証ゲートに近づいた瞬間に失敗防止AIが反応した。

『PersonaXを起動し、多次元認証を開始します』

青い光が僕と井上翼紀をスキャンする。顔認証だけでなく、歩き方や仕草、呼吸のパターン、さらには心拍や潜在意識に至るまでが解析・照合されていく。

『認証完了。佐藤翔宙様、井上翼紀様ですね。本日は普段とは異なる実に楽しそうな装いですね。ぜひ、楽しいご旅行を。航空券の手配はこれからのようですが、ここで購入されますか？』

「……いや、やめておきます」

「恥ずかしい思いをしただけでしたね」

星宙が大きな体を揺らして楽しげに笑うと、井上が唐突に立ち上がった。

「それです！」

僕も星宙も呆気にとられ、「それってなに？」と男二人で見つめ合う。

「私たち、もう失敗していたんです！」

「失敗……していた？」

「そうです。失敗することに失敗していたんです！」

目を輝かせる井上翼紀の思考にようやく僕も追いつく。

「そうか！　これが現在の失敗、新しい失敗の形なんだ！！」

なにがなにやら分からないといった様子の星宙に礼を言い、僕は井上と駆け足でジャパン・ドリームプラザへ戻る。

「正直に白状すると、途中から『何をやっているんだろうな、僕は……』って思っていたよ。さっきまで」

「私もです」

——半年後

このところの学会発表が盛況だと聞く井上翼紀のアフタクシヨン・ストウブ・シネフィルにおける新しい講演は今日も賑わっていた。

失敗学など齧ったことがなく、まして学会発表など見に来たこともないド素人の僕でも楽しめているのだから幅広い層に人気があるのも頷ける。

彼女が発表に使った四回の『失敗の失敗』事例は、もちろん先の挑戦によるものである。

「これまでの失敗とは『意図しない結果』のことでした。しかし、正確には『意図しないマイナスの結果』を人は失敗と感じていたのです。『意図した失敗の失敗』という二重の否定構造を持っている失敗の場合も同様で、これがマイナスの結果になる場合、従来の意味の失敗となったのかもしれませんが。けれども技術の発達によって意図しないプラスの結果を約束されている現代においては——」

説明の途中で彼女の指がくるくると踊ると中空のデータもそれに合わせて回転し、新しい角度からの分析結果の表示に変わる。感情波形解析技術が研究対象の男性の、すなわち僕の、心理状態の変遷を色鮮やかな波形で示している。

「興味深いのは彼の満足度です。従来の失敗体験ツアーでは得られない、新しい種類の感情を得ているのが分かります。さらに本実験時に作用した失敗防止AIのログを調べさせてもらった結果、通常の十倍のリソースが使われていることが分かりました。つまりAIにとっても、これは学習すべき想定外、未知の現象だったのです」

こうした翼紀の論文による学術的な裏付けも後押しして、今、世間では『失敗の失敗』が一大ムーブメントを巻き起こしていた。

誰かの失敗を疑似体験するのでなく、自ら失敗へ挑戦し、失敗の失敗を直に体験する。

曰く『人間 vs AI』 正確には『失敗したい人間 vs 失敗させたくないAI』だ。

全国のサブコンシャス・ショッピングモールからリアルタイムで配信される『失敗への挑戦』といったコンテンツも誕生し、僅か数か月で佐藤翔宙の名は『完璧な社会への反逆者』として拡散された。言うまでもなく、ジャパン・ドリームプラザは連日予約で満員で、小林をはじめとするアルバイトからの忙しすぎるという小言が鳴りやまない。嬉しい悲鳴だ。

「それではここでご本人にもご登壇いただきましょう。佐藤さんです」

翼紀の学会発表に万雷の拍手で迎えられるも今日も今日とて僕のやることは変わらない。そう、失敗への挑戦だ。今回は少しだけその規模が大きく、全国47箇所に同時中継される『史上最大の失敗への挑戦』に挑戦する。

「皆さん、本日はお集まりいただき、ありがとうございます。学会発表といったこのような場が初めてで緊張しております。それこそ失敗に失敗しようとして、今日は本当に失敗できてしまいそうですが、はたしてAIはそんな僕すら失敗から守ってくれるのか？ それでは、これからこの完璧な社会へ失敗という形で挑戦してみます」

井上翼紀の拍手に牽引され、観客が期待を胸に大きく手を叩く。

「まず、こちらのスマートフォンを落として画面を割ってみます」

僕が手を離すと一度は落下したスマートフォンが地面すれすれから急浮上して手の高さで宙に浮く。

「こういった事は皆さんも一度は経験がありますよね？ それでは、これならどうか？」

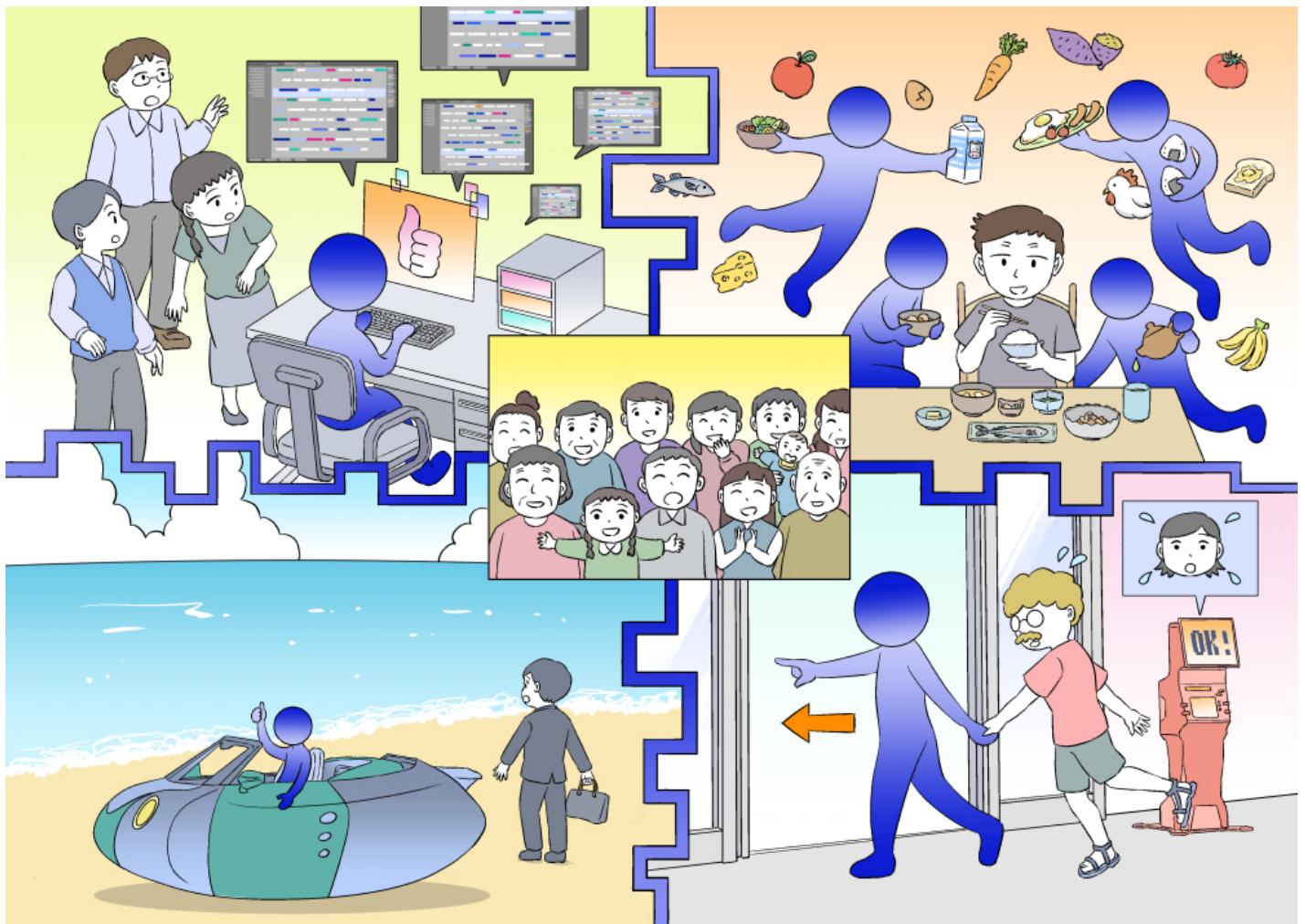
今度は掴んだスマートフォンを地面に向かって勢いよく投げつける。しかし、今度も同様にひらひらと舞って手の高さへ。

「こうなると、ちょっともう馬鹿にされているような気になりませんか？」

観客から小さな笑いが漏れる。

「それでは次に料理を焦がして――」

徐々にエスカレートしていく挑戦に次第に観客も沸いていく。必死に失敗しようとするほど会場は笑いに包まれ、「この挑戦、自分もやってみよう」や「自分なら失敗できるはず」という次なる挑戦者を生んでいく。学会での配信は成功をおさめ、失敗の失敗ブームは、当面、冷めないだろう。今やインバウンドの軸も『失敗の失敗』体験となり、全国各地へ海外からのチャレンジャーが失敗をしにやって来る。



「おつかれさまでした」

「おつかれさま。しかし、まさかこんなことになるなんて……」

「失敗しようとして大成功しちゃいましたね」

「失敗することには失敗したままだけどね」

客が退いた後の会場で僕が言えば、翼紀が微笑みながら返してくる。

「佐藤さんが失敗したかったのって衰退しつつある失敗体験ツアーをどうにかするためですよ？ 失敗体験ツアーは観光コンテンツ、人を楽しませるためのものです。失敗には失敗しても、それで新しい観光コンテンツを生み出し、多くの人を楽しませられているんですから、本質的な目的は達成できたってことでいいんじゃないですか？」

「たしかにね。初心にかえれば、お客さんに楽しんでもらいたくて失敗体験ツアーのガイドになったんだし、結果的にみんなに喜んでもらえているなら、すべてOKってことかな？」

その時、会場のスピーカーからどこかで覚えのある声が聞こえてきた。

『佐藤翔宙様、井上翼紀様。お二人の活動により停滞していた社会全体の幸福度が50ポイント上昇いたしました。素晴らしい社会貢献・成功事例として、ここに表彰させていただきます』

「AIが僕たちを表彰だって？」

「驚きましたね」

『今回は助かりました。失敗を未然に防ぐことがすべてでなく、時に軽微な失敗をあえて見過ごし、防がないことで社会全体の幸福度が上がるかもしれない、といった仮説は我々の側にもあったものの、どの失敗を見過ごし、どの失敗を防ぐべきか、どうにも判断をつけられずにいました。しかし、お二人のおかげで、こちらがすべての失敗を防いでも、失敗に失敗するという新しい概念によって新しい失敗が生じることになりました。これで難航していた判定ロジックの検討を続けず、こちらは引き続きすべての失敗を防ぐことに注力できます。ありがとうございます』

「まあ、でも、いつかきっと君の想定を上回って僕が失敗してみせるけどね」

『望むところです』

「――今日はどんな失敗に挑戦なさいますか？」

アルバイトだった小林永莉も今や失敗体験ガイドとしてジャパン・ドリームプラザで活躍してくれている。自らも失敗防止AIとの知恵比べに熱中し、そのまま好きなことを仕事にしたいらしい。

「今日は『遅刻』に挑戦してみます。わざとゆっくり歩いて約束の時間に遅れてみせます」

「それでは公共のモビリティや自動歩道を使わないことをオススメします」

「他にコツはありますか？」

「難しいですね。私もまだ失敗できたことがないので……」

「よし！ それじゃあ私がその一番手になりますね！！」

「頑張ってください！ 応援しています！！」

『おつかれさまです。本日も完璧な一日でした』

ホログラムディスプレイによって本日の来店者数が中空に表示されている。かつての何百倍もの桁数で。顧客満足度は98パーセント。2075年、誰もが失敗を志し、しかし、未だ誰一人として失敗できていない。それでもサブコンシャス・ショッピングモール『ジャパン・ドリームプラザ』は今日も多くの笑顔であふれている。

いつかを、 いまに、 変えていく。

すべては、いつか実現したい未来を描くことから始まる。

NECソリューションイノベータは、
お客様価値を最大化するシステムインテグレータとして、
まだ見ぬサービスを生み出すバリュー・プロバイダとして、
めざす未来をともに描き、創っていきたい。

いつかを、いまに、変えていく。
私たちは常に挑戦していきます。





\Orchestrating a brighter world

NECソリューションイノベータ